保険毎日新聞「みちくさ保険物語」059

保険史料からみた漫画の歴史(4) 帝国生命の初期漫画

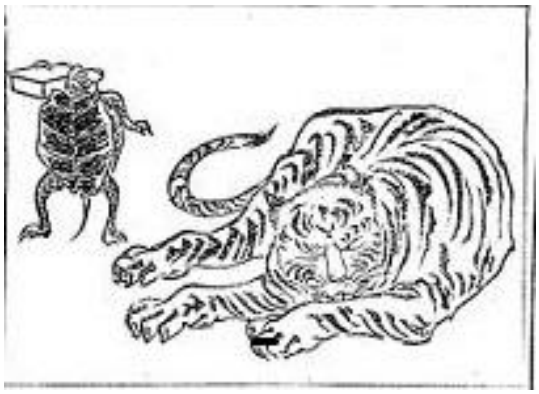
帝国生命（現朝日生命）は、明治生命に続いて二番目に設立された近代生命保険会社である。同社は、明治生命が福沢の関係から実業家や技術者を中心に営業を拡大したのに対して、官僚や軍人などを中心に生命保険市場を拡大したといわれている。

ここに紹介する同社の初期の募集史料は、ストーリー性において典型的な初期の漫画の事例である。ストーリーの源流をさぐれば、「花咲か爺」のような民話にたどりつくかもしれない。民話では正直者が最後に得をするが、保険募集史料では保険に加入すると最後には幸福に至る。この漫画は、これまでにもたびたび紹介しているが、コマごとに紹介することはなかった。今回は、対照的な二コマをセットにして紹介する。読者の方に漫画を味わっていただきたい。

(1) 亀吉「保険は遺産を作る開化の良法」

(2) 虎造「飲め、謡へ、若い時は二度はねへ」

最初の二枚は、亀吉と虎造という対照的な二人の人物が登場する。最初のコマでは、亀吉が、「生命保険は遺産（かたみ）を作る開化の良法（よきほう）だ」といって、今月分の掛金を払うついでにもう一口入る様子が描かれている。これに対して虎造は、「亀公の野郎は余程（よっぽど）馬鹿な野郎だ。永い浮世に短い命、儲けた金は己（おれ）のように芸者や女郎を買ふて面白く使ってしまえばよいのに。郵便局に預けたり保険会社へ掛金（かけきん）したり。けちけち貯蓄（ため）くさるが、なんになるものか。金は世界の湧きものだ。」と二度とこない若い時代を酒と女で享楽的な生活。



(3)　虎造「先ずひと寝入りして。」亀吉「出精が肝腎だ。」

(4) 虎造「亀さん恐入りました。」亀吉「やれ、お気の毒な。」

3 コマ目に勤勉な亀と怠惰な虎が対比的に描かれている。虎造「己れは身体（からだ）もよし働（はたらき）もあるから、何時でもやる気にさえなれば人に負けることもなし。金もできるから亀公のように不断あくせく稼いだり金（ぜに）を貯蓄（ため）たりするには及ばん。嘉報（かほう）は寝てまてだ。」亀吉「己れは虎公と違て身体（からだ）も弱し働（はたらき）もないから、常々稼いで金を貯て置かねば年老いてから妻子に難儀をかけることもあろう。人でも己れでも同じことで出精（しゅっせい）が肝腎（かんじん）だ。」

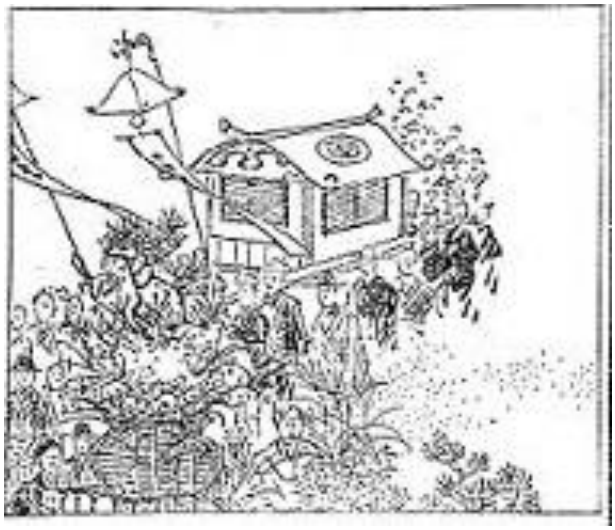
4 コマでは、虎造が自分の過ちを自覚して次のようにいう。虎造「身体がよくて器量があれば、何時でもなんでも出来、金もどえらく得られると思ふたは私の過失（あやまり）。常不断稼ぎつけねば働も出来ず金も出来ません。嗚呼（ああ）あやまった。」これに対して亀吉曰く。「ふだん怠惰（なまけ）て居て急に思立て徐（あまり）に過劇（かげき）な運動を為るから気絶して仆（たお）れるのだ。なんでも年中たるみなく稼ぎつけねば、仕事も出来ず金も貯りはしねへよ。お前のような了簡違な人の世間に多いには困るのサ。」

(5) 亀さんの病気

(6) 虎公の病気

続く 5 と 6 のコマでは、亀吉と虎造が病気になった際の対照的なシーンが展開される。亀吉の病気を心配した金貸しと親類の対話は次のとおり。(金貸)「亀さんが御病気だそうですが、金が御入用（ごにゅうよう）なら幾何でも御用達（ごようたて）ますから、御遠慮なしにおっしゃいまし。」親類曰く。「亀は常々倹約して金も少々は貯蓄(ため)て居りますし、保険会社へ数千円の保険も付けて居りますから、今日只今万一の事がありましても、遺族の困ることは御座りません。」そこへ出入の商人が駆けつける。「旦那が病気ださうですから、一寸御見舞に出ました。粗末ながら、此の品を上げて下さいまし。」

この辺から、両者の運命が大きく分かれてくる。虎造のコマでは次のように描かれている。「虎公が病気だが、彼奴（あいつ）は怠惰者（なまけもの）のくせに、金銭（ぜにかね）が出来ると直ぐ芸者や女郎を買ふて使い果たし、家には少々の貯蓄（たくわえ）もなし。親類縁者も見捨て居るから死なぬ内に早く道具でも衣類でも攫去（ひきさら）はぬと、借しだをれになりますぞえ。米屋さんも呉服屋さんも薪屋さんも早く何でも持って往かっしゃれ。此家主が承知だ。（虎造）皆な私が悪いから仕方はねへが、布団一枚だけは勘弁して下され」



(7) 亀さんの葬式。

(8) 虎さんの哀れな死

次に、両者の人生最期における対照的な結末が比較されている。亀さんの葬式。「みなさん、出て御覧なさい。亀さんの葬式が通りますよ。彼（そ）の立派なこと。華族様の葬式でもおよばんやうですよ。保険会社から大層お金が来たので、あんな立派な葬式を出して、。まだ後に澤山お金があるので、家屋を新築し延喜を祝って立派に商売を始むるのだそうです。」これに対して、虎造の惨めな死は次のように描かれている。「虎さんお前はなァー。死でから金を貰うは縁起が悪いなどと云ふて、保険会社へも這入（はい）らず、金は世界の湧きものだなど云ふて貯蓄（ため）もせず、肝腎な時分に放蕩した心からと云ひながら、病気になっても薬も飲まれず、家財財産は人様に持って行かれ、棺桶を買ふ銭もなき死恥をかき、妻子にまで食ふや食はずの難儀をかけるとは、何たる因果の生まれぞや。」

(9) 一家の繁栄。

(10) 悲惨な遺族。

漫画の結幕はご覧のように、亀吉の家族の一家繁栄と虎造の妻子の悲惨な状態で閉じられている。最後のコマに作者名が記されているようだが、現時点で作者が不明である。専門家の方にご教示いただければ幸いである。

帝国生命は、生命保険が家族の繁栄にとっていかに大切なものであるかと漫画で訴えることにより、保険需要を喚起している。また詳しく触れなかったが、最初のコマで亀吉が郵便局から生命保険に目を向けたということが記されている。このようなことから、帝国生命は、当初は創業者の出身である海軍をはじめとして都市中産階級にターゲットを絞ってい

たが、まもなくより広範な階層の人々にも生命保険の募集を狙うようになったことを、この広告は明らかにしているのである。画像資料は文字以上に真実を語ってくれることがある。